８．正澄の立子山小学校での教育

正澄は容姿を整え、礼儀作法を正しく守る。校長室には家人といえども、無断入室を許さず、いつも羽織袴で威儀を正し、端然と正座して事務を執り、書見にふける姿は天領地で士族が一人もいなかった立子山には珍しかった。「天神様」と呼ばれる。

教育内容---文部省編纂の単語篇、連語篇、小学読本、修身訓を教える。教える精神は儒教思想、武士道精神。上級生が下級生の学習を見る。卒業生中から成績優秀者を選び助教にする。教育に熱心で、生徒に対しても非常に親切。父兄の信頼も高まる。
明治期以前の惰性で就学しない者が多数いた。また婦女子には就学を顧みる者が少なかったが、正澄の熱心な勧説により、就学率は向上する。明治13年には男128人、女99人、計249人になる。
青年指導の夜学会も開催。妻ウタは村の女性たちに裁縫を教える。

９．正澄の貫一への教育

正澄は貫一に対し早期教育を行う。小学校時代に「近古史談」、「日本外史」、「四書五経」などの古典を読ませる。それだけでなく、戊辰戦争での二本松少年隊の奮戦や落城、立子山に残る伝説、二本松の地理沿革、戊辰の戦乱、二本松少年隊の奮戦、落城の模様、その後の苦難を説き聞かせる。

また貫一の伯母・八重の縁につながる安藤祐助（安積 艮斎、二本松藩および幕府の昌平黌の儒官も務める）の業績も語り聞かせる。

安積 艮斎---死の直前まで書物の講読に明け暮れる。朱子学から勉学を始めたが、儒教思想をたんなる訓詁学ではなく、実践の学・社会変革の学として捉え直す。文章に持って天下国家を導く。多くの幕末の知識人に影響を与える。

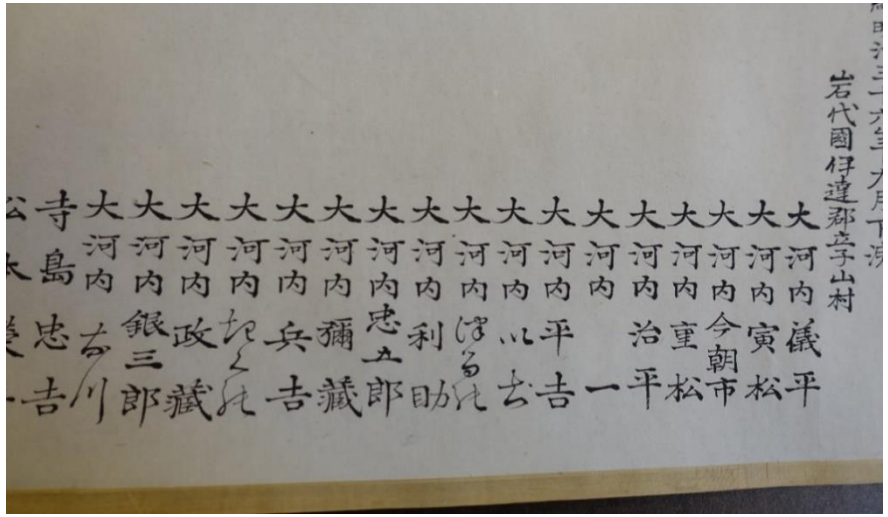
10. 正澄の退職と『報恩之辞』

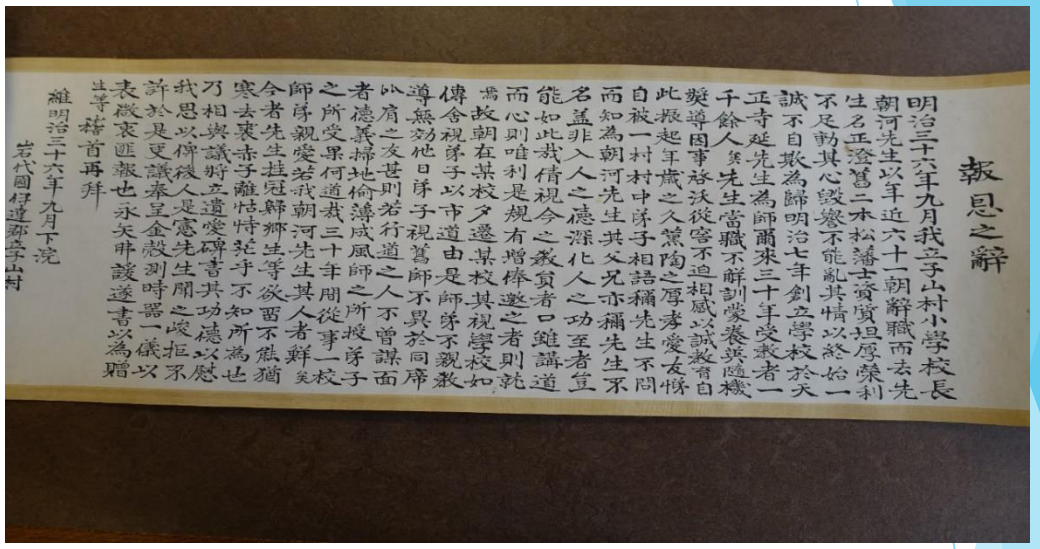
1902年6月、貫一がイェール大学で「大化改新」により博士号取得。
同年9月、貫一はダートマス大学講師となる。
1903年(明治36年)7月、後妻ヱヒが45才で病没。

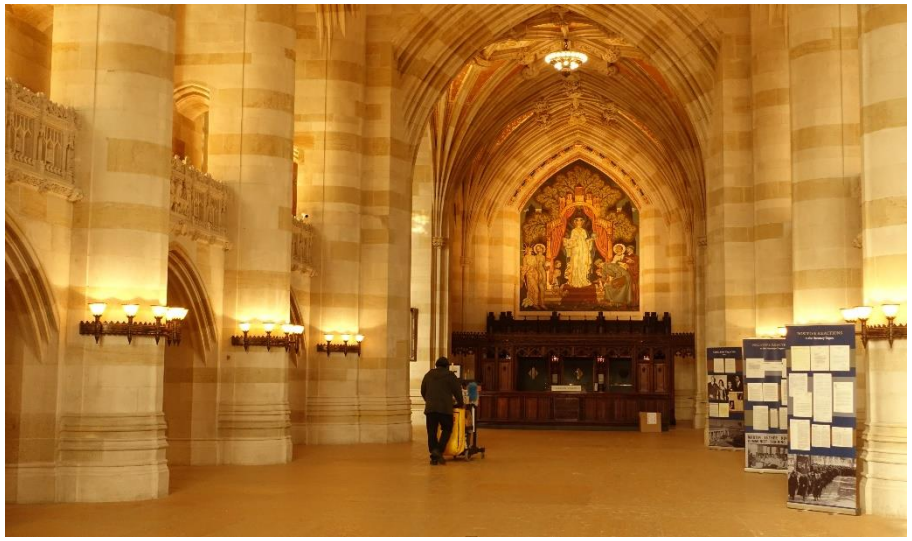
正澄は、妻ヱヒの突然の死もあり、退職を決意する。
同年9月下旬、立子山村民からの記念品（大型金側懐中時計と金鎖）と拠金者による感謝状『報恩之辞』の贈呈。
同年10月29日、立子山小学校長を退職。
同年10月20日、朝河校長送別会の開催。約1300人の立子山村民が参加。

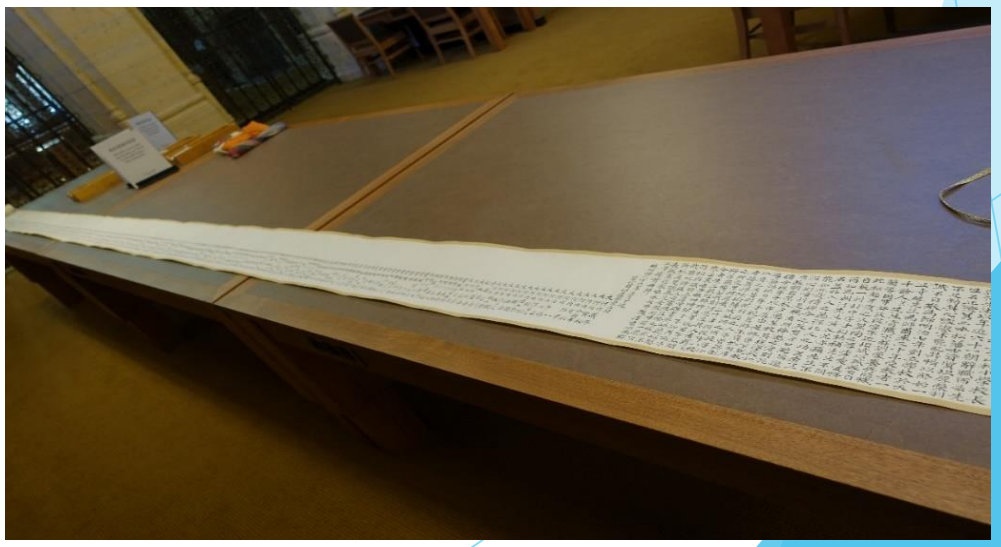
正澄は二本松に移り住む。ヱヒの姪の関根キヨが家事を手伝う。

11.『報恩之辞』（イェール大学・スターリング記念図書館所蔵）









12. 『報恩之辞』(現代語訳)

明治三十六年九月、わが立子山村小学校長の朝河先生は、六十歳を間近にしたある朝をもってその職をお辞めになり学校を去ることになりました。先生は、その名を正澄といい、もとは二本松藩の藩士で、たいへん穏やかな性格で、栄利に心を動かされることや、人の誹りや誉め言葉に心が乱されることもなく、つねに何事も誠意を持って行ない、自らを欺かないことを自身のよりどころとしました。

明治七年、天正寺に学校が創立されると、先生をお招きして校長となっていただきました。それから三十年、教えを受けた者は千人を超えました。先生は寸暇を惜しんで仕事にあたり、子どもたちを教え諭し、その能力を引き出し、折に触れて導いてくださいました。事にあたっては心を開いて教え導き、穏やかな気持ちで子供たちに接し、互いに感じあって誠をもって教育にあたってくだったことで、子どもたちは奮い立ちました。

長き年月を経て、薫陶は厚く、教えを受けた者たちは皆仲良く孝養を尽くし、村中の者たちが先生の教え子となったので、互いに話をする時「先生」といえば朝河先生のことだと誰もが思い、教え子ばかりかその父兄たちまでもが、その名を呼ばずにただ「先生」と称したものです。思うに人の徳を深めることを人の功の極みだとすることが非難されるならば、どうしてこのようなこと（「先生」といえば朝河先生を指すというようなこと）がおきましょうか。

よくよく考えて今どきのほかの教員たちを見れば、口では人の道を説いてはいるけれど、心の中では自らの利益を第一に考え、給料の増額をもって招く者があればそちらに就職します。

それゆえに、朝にはこちらの学校に勤めていたかと思えば、夕方には違う学校に遷ってしまう。学校はまるで宿場の仮の宿、弟子と言っても市への道で出会う人々のようです。これでは師弟が親しむことはなく、教導の効果もありません。後になって弟子が先生に会うことがあっても、共に学んだ学友に抱くのと同じ程度の感情を持つくらいでしょうし、はなはだしい場合は、道を行く人と同じように、これまでに会ったことがない、とすら言うことでしょう。

徳義はすっかりすたれてしまい人情は薄くなってしまいます。立派に育てようという先生の教えが、それを受ける弟子たちにとって、果してどのような道が残るというのでしょう。

三十年間同じ学校で教壇に立てば、師弟の親愛は深まり、まさに朝河先生のようになることはあきらかでありましょう。

今、先生は職を辞して故郷に帰ることになりました。思いとどまってほしいと願いましたが、その思いはかないませんでした。まるで寒さに震える身から厚い皮衣を奪われるような、生まれたばかりの赤子のような身で頼みとするところを離れ、茫然としてしまい、どうしてよいのかわからなくなりました。

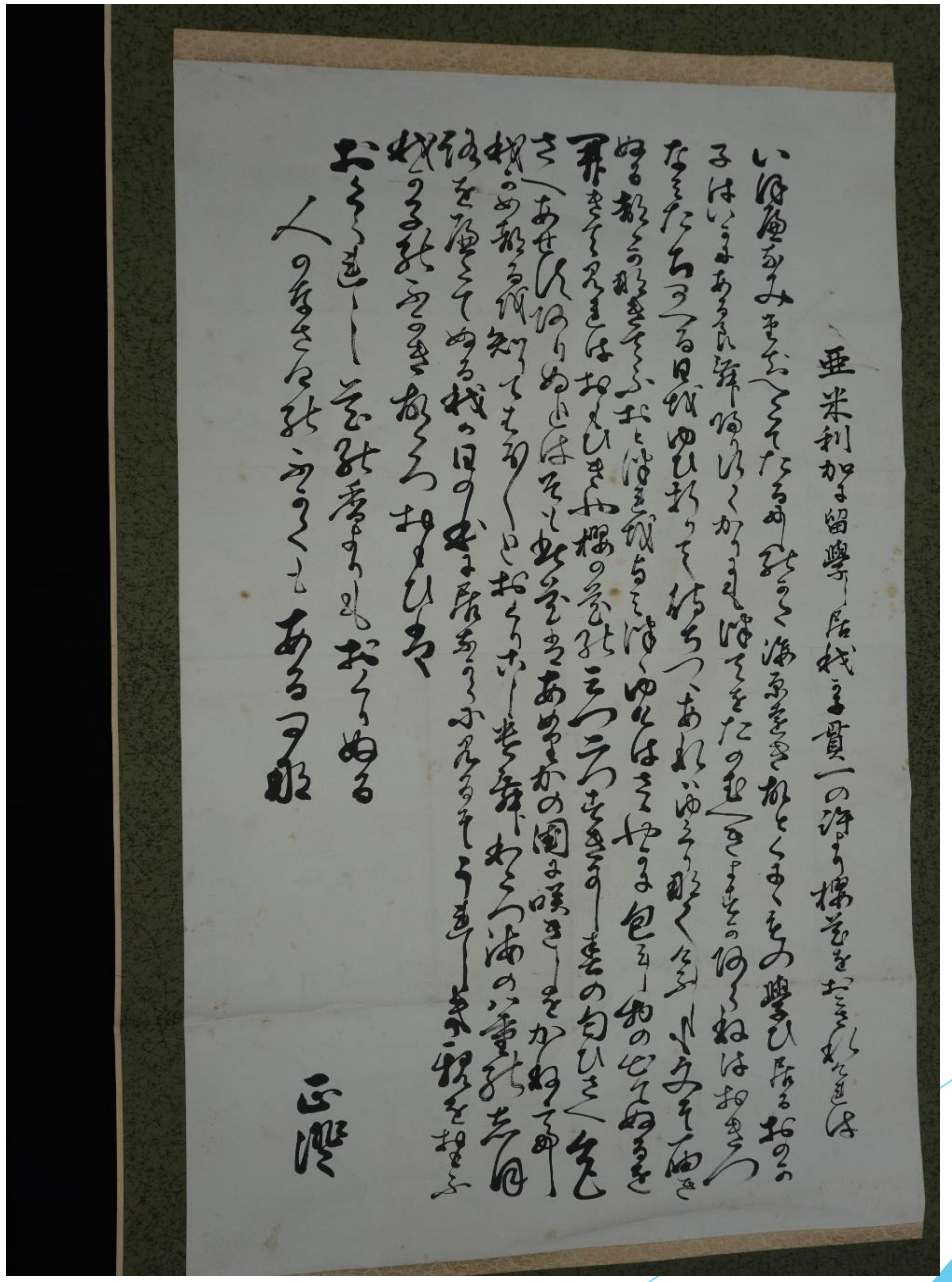
そこで皆で話し合い、遺愛の碑を立てて先生の功績を讃える書を遺すことで我々の思いを慰めるとともに、後の人々に伝えようとしました。ここで先生がこのことをお聞きになると、きっぱりと断り、許してはくれませんでした。

そこであらためて皆で話し合い、心ばかりの品として金時計を差し上げることとしましたが、それくらいのことでは私たちの気持ちをあらわすことも、先生から受けた恩に報いることもできません。せめて永く忘れないために、ここにその思いを書き認めて、お贈りすることとします。

稽首再拝いたします。

明治三十六年九月下旬

（早稲田大学非常勤講師・藤原秀之氏作成）

13. 朝河正澄の書幅

（福島市立子山・高橋秀雄氏蔵）